

日本近代文学館

二〇一四年度 春の企画展

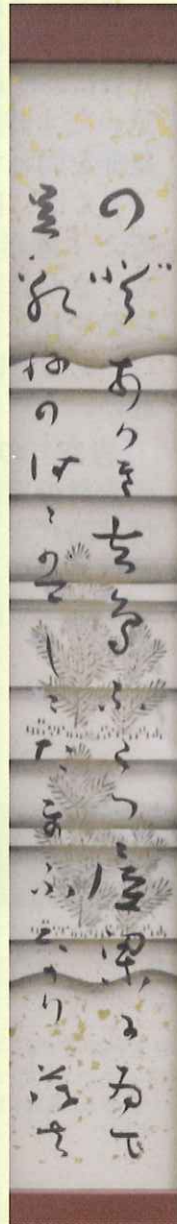
青春の詩歌

監修 中村稔

2014年

4. 5 [土]

6. 14 [土]



のどあかき玄鳥つばくらめふたつ屋梁はりにゐる足乳たらちねねのはしはしにたまふなり 茂吉



やは肌のあつき血しほにふれもみでさびしからずや道を説く君 晶子



公益財団法人
日本近代文学館

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-3-55

開館時間 ◎ 午前9時半から午後4時半
観覧料 ◎ 200円 (20名以上の団体は一人100円)
主催 ◎ 公益財団法人 日本近代文学館

休館日 ◎ 日曜日、月曜日、第4木曜日
アクセス ◎ 京王井の頭線「駒場東大前」駅より徒歩7分
お問合せ ◎ 03-3468-4181

主な出品作品

島崎藤村「千曲川旅情の歌」

(小諸懐古園詩碑原本)

斎藤茂吉・短冊額

「のどあかき玄鳥ふたつ屋梁にあて足乳ねのははしにたまふなり」

与謝野晶子・短冊額

「やは肌のあつき血しほにふれもみでさびしからずや道を説く君」

佐藤春夫・軸「断章」

塚本邦雄・短冊「宍道湖のしんじつ妻にはるかなる」

三好達治・色紙

「山なみ遠に春はきて辛夷の花は天上に
雲は彼方に帰れ共帰るへしらに越ゆる路」

加藤楸邨・軸「隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな」他

愛用遺品(水滴、筆立、硯)

安東次男・色紙「悲運にも似たり林檎を枕とし」

石田波郷・短冊額「初蝶や吾か三十の袖袂」

沢木欣一・色紙「雪白の溢るゝごとく去りにけり」

俳句手帖

その他多数出品

現在活躍中の詩人、歌人、俳人による揮毫作品

荒川洋治	尾崎左永子	坂井修一	坪内稔典
安藤元雄	角川春樹	佐佐木幸綱	永田和宏
井坂洋子	金子兜太	新川和江	中村稔
伊藤一彦	栗木京子	高野公彦	長谷川權
宇多喜代子	黒田杏子	高橋順子	馬場あき子
梅内美華子	小池昌代	高橋睦郎	穂村弘
岡井隆	小島ゆかり	鷹羽狩行	米川千嘉子

ほか

『青春の詩歌』 展開催にあたって

青春は人生においてもっとも波瀾に富んだ時期である。異性との恋愛を体験し、そのために、心のときめきを感じ、昂ぶりを覚え、失意し、悩み、苦しみ、もっとも敏感に、私たちの心が動揺し、動揺のあらゆる相をめぐる時期である。

青春はまた、私たちが社会とはじめて接触する時期である。そのために社会の秩序と摩擦を生じ、違和感を感じ、社会における自己のあるべき場所、自己の進むべき方向を見いだす時期であり、志を同じくする者を知り、理由の是非を問わず、人生に反撥する時期である。

多くは、私たちは、二十歳代から三十歳代の初めにかけて、「青春」を体験する。しかし、四十歳代になっても、さらに、五十歳代、六十歳代になっても、そうした年齢を超えて、人によっては「青春」の懊悩をいだき続け、あるいは「青春」の歓喜を味わうことも決して稀ではない。

「青春」のそうした性格のため、青春はいつも文学作品の素材の宝庫であった。しかし、青春に対する感覚、感情は時代とともに変化する。本展観は俳句、短歌、現代詩において、どれほど豊饒で繊細な世界がひらかれてきたかを示す試みである。

公益財団法人日本近代文学館 名誉館長 中村 稔

同時開催

川端康成の四季と死の美学



春は花夏ほととぎす秋は月
冬雪さえて冷しかりけり

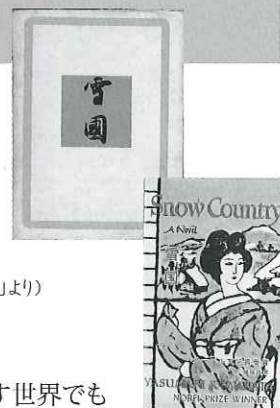
私の作品を虚無と言ふ評家がありますが、西洋流のニヒリズムといふ言葉はあてはまりません。心の根本がちがふと思っております。

道元の四季の歌も「本来ノ面目」と題されてありますが、四季の美を歌ひながら、実は強く禪に通じたものでせう。
(「美しい日本の私—その序説—」より)

日本初のノーベル文学賞受賞作家・川端康成の代表作、「雪国」。
雪深い土地を舞台に描かれる男女の相克は、「死」が色濃く影を落とす世界でもあります。そして妖しく美しい異界を描いたという点で「雪国」と通ずる後期の傑作・「眠れる美女」。本展ではこの二作を中心に、川端文学における「死」について、また、その作品世界の美に大きな役割を果たしている作家の「四季」観について、当時の資料・遺愛の品とともにご紹介します。

写真:左 ロマンの「女の手」に見入る川端(昭30頃)／上『雪国』(創元社 昭12.6)／下『Snow Country』(タトル商会・昭32.1)

併設の川端康成記念室にて開催
企画展の入場料で同時にご観覧いただけます



交通のご案内

京王井の頭線下車
西口改札から徒歩7分

(お問合せ)
TEL: 03-3468-4181

公益財団法人

日本近代文学館

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-3-55

H P ©http://www.bungakukan.or.jp/

the Museum
of Modern
Japanese
Literature